

くまさんだより

日本基督教団 豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

公式サイト <https://azumada.org/> 中島 善子牧師

2024年

10月号

10月24日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供



10月13日 主日礼拝

「恐れと畏れ」中島 善子牧師

出エジプト記 4章1～17節 旧約聖書98～99頁

神が、高齢の羊飼いモーセに、エジプトで奴隷として働くイスラエルの民を連れ戻すよう命じたのが前回の3章。神はモーセを助けると言われたが、勿論、そんな危ない橋は渡りたくないモーセは抵抗する。彼がエジプトに行って、直談判する相手は、ファラオ。「神が命じたので、イスラエルの民を帰国させてください」と申し出て、ファラオが「承知した」と言うわけがない。と言うより、ファラオの怒りに触れ、たちまち殺されてしまうのは明らか。

また、イスラエルの民をエジプトから導き出すと言っても、老いた羊飼いの言葉をイスラエルの民が信用する保証も無い。ファラオからも、イスラエルの民からも、相手にされず、骨折り損に終わる務めにしか思えない。否、命を失う愚かな務めでしかない。だからモーセは、この務めを、何とか引き受けずに済ませたい。

私達に「立派な指導者モーセ」というイメージがあるが、ここでモーセは、従来のイメージと程遠い。すると神は完全に腰が引けるモーセに、持っている杖を地面に投げるよう命じた。杖を投げると、杖は蛇に変わり、モーセは飛びのいた。そのモーセに神は更に告げた。「手を伸ばして、尾をつかめ」と。彼が恐る恐る蛇の尾をつかむと、蛇は元の杖に戻った。この徴を人々に見せれば、神がモーセに現れたことを信じると、神は告げた。しかし更に神は、徴を続ける。

神はモーセに手を懐に入れるよう命じた。そして懐から手を出すと、彼の手は重い皮膚病にかかり、白くなっていた。神はその手を再び懐に入れるよう命じた。懐から手を出すと、手は癒されていた。蛇の徴と手の徴を見せても、信じない人々のために、神は三番目の徴として、モーセがナイル川の水を汲み、地に撒けば、水は血に変わると、約束した。

神はモーセをエジプトに遣わすため、彼に神の徴を見せて、神の徴を行う力も彼に約束した上で、

神自ら、モーセへの使命を支えた。だがモーセは腰が引けたまま、神に言い訳をする。10節。

「ああ、主よ。わたしはもともと弁が立つ方ではありません。あなたが僕にお言葉をかけてくださった今でもやはりそうです。全くわたしは口が重く、舌の重い者なのです。」

モーセの弱音を聞き、私達は呆れるが、この時、彼は80歳だったと言う。もし私達が80歳の羊飼いで「エジプト王ファラオを説き伏せ、エジプトの奴隷として働くイスラエルの民を引き連れて、カナンへ旅立たせろ」と言われたら、私達も尻込みする。

当然、モーセも「私は話すことが苦手だ」と神に向かって言い訳をした。でも言い訳するモーセに、神は反撃する。11節。

「一体、誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けないようにし、耳を聞こえないようにし、目を見えるようにし、また見えなくするのか。主なるわたしではないか。」

目、口など、あらゆる賜物を私達に与えるのは神。神が賜物を与えるのは、それを使って、神の計画をこの世で現していくため。従って各自に与えられた賜物で、それぞれ何ができて、何ができないかを、最もよく承知しているのは、神ご自身。その神が、「語れ」とモーセに命じている。どんなに「ムリ、不可能だ」とモーセが思っている、それでも尚、神が「語れ」とモーセに命じるのは、神から「語ることが出来る口」が、既にモーセに与えられているからだ。しかも12節。

神はモーセに「このわたしが、あなたの口と共にあって、あなたが語るべきことを教えよう」とまで言う。神はモーセに「語れる口」を与えるだけではなく、神がモーセと共にいて、いつでも語るべき言葉を神が教えると、万全のアフターケアを約束された。この約束はモーセだけでなく、イエス様も弟子達に約束されている。「何をどう言おうかと心配してはな

らない。そのときには、言うべきことは教えられる。実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる父の霊である」(マタイ10:19-20)。聖霊に「語れ」と命じられて、人はそれぞれの場に遣わされる。

それは、神が語るための口を私達に与えて、神が私達の口と共にいて、語るべき言葉を、神自ら私達の口に含ませてくださるからだ。神からの万全のアフターケアがあるから、つたない私達の口だが、私達は聖なる神の言葉、聖なる神の御旨を語る事ができる。

だからモーセも、山奥の羊飼いだろうが、80歳の老人だろうが、ただ神の力によって、ただ神の力に依り頼むことで、神の御旨を語る事が出来る。

だがモーセは頑なに神の言葉を拒む。尚も神に「ああ主よ。どうぞ誰か他の人を見つけて、お遣わしてください。」(13節)と言った。当然、神は怒られた。モーセがこれほど抵抗するのは、エジプト派遣が、ファラオとの対峙抜きには果たせない務めだということ、モーセが心底、恐れていたからだ。

ファラオには「絶大な権力から来る頑なさ」があり、それをモーセは恐れた。また「奴隷の民イスラエルの屈折した頑なさ」も恐れた。更に80歳の羊飼いと「自分の無力さ」を何より恐れていた。幾重にも重なる恐れは深い闇となってモーセを飲み込む。その深い闇の中で「神のために、同胞イスラエルのために、しっかり務めを果たせ！」と命じられているようで、モーセは恐ろしくてならない。

分かる気がする。「伝道しよう」とする私達の前に立ち塞がるのは、まず恐れだ。

「私が語っても聞いてもらえないのではないか。それどころか怪しいと誤解されるのではないか」。私達は傷つくことを恐れる。だから人の頑なさを、自分の無力さを恐れる。モーセのように、私達も、多くの恐れの中で意気消沈して、神の言葉、神の助けに信頼できなくなり、ついに神に聴き従うことを拒んでしまう。この時、「恐れ」が不信仰に関係していることに、私達は気づかされる。

モーセは神から多くの徴を示され、神の助けを約束されていたが、それよりも、彼の脳裏に強烈に焼きついていたのは、恐れだった。モーセは神と出会い、神と語り合い、神が彼と共におられたのに、そんな驚くべき神の恵みも気づかないほど、彼は恐れに囚われ、不信仰の只中にいた。神が目のおられたにもかかわらず、モーセは恐れで、神が見えなくなり、神の言葉を信じて聞くことができなくなっていた。ファラオやイスラエルの民の頑なさに、モーセが文句を並べる前に、モーセ自身が、神の力を信じない者、神を拒む者、神に頑なな者だった。

頑ななモーセは神に捨てられて当然なのだが、神は彼に怒っても、彼を捨てない。神はモーセの口下手を補い、彼の兄弟アロンを、彼の口代わりとしている(15節以下)。

神は御業を持ち運ぶ神の器として、人を選び、用いる。だが神が誰を選ぼうとも、選んだ器は皆、歪んだ器。神が選んだモーセも、頑なで、不信仰で、歪んだ器だ。恐れと言う「不信仰の暗闇」に、目を塞がれて、何も見えなくなる歪んだ器だ。でも神は選んだ器を見捨てない。神は膝を屈めて、あの手この手で歪んだ器を補い、育てて、寄り添いながら、選んだ器を御業のために用い、共に歩まれる。

兄弟アロンの助けを借りていたモーセも、やがて自分の口で語り出す。拙い口と共に神がおられ、語るべき言葉を与えてくださると体得して行くから。と同時に、貧弱な自分を、忍耐強く導いてくださる神への畏れに、モーセは目覚める。臆病だったモーセは、神に用いられて行く中で、神だけを畏れる者へと成長して行く。私達も同じだ。

苦難や死を恐れる私達に、神はキリストを伴わせてくださる。世の暗闇は元より、死の暗闇に行く時も、キリストは決して私達を離れない。永遠に私達を手離さないために、キリストは私達と共にいてくださる。私達が陰府に降っても、キリストは私達を手離さず、死の底を駆け昇り、私達を神の懐に導いてくださる。

「死の陰の谷に行く時も、私は災いを恐れない。あなたが私と共にいてくださる」(詩編23:4a)。

「小さな群れよ。恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」(ルカ12:32)。

私達は弱い。でも弱い私達と共にいるためなら、神は何でもする。ご自分の御子キリストを十字架につけ、死に至らせた。更に陰府の底からキリストを復活させて、復活のキリストと同じ命と体を、私達に用意してまで、神は私達を神の国に住まわさせてくださる。

この幸いに目覚める時、私達は「心から神を畏れ敬う者」とされる。また神を畏れるから、私達は世の力を恐れず、神の招きに従って行く。

神が私達と共におられるから、私達は畏れ多い神の恵みと共に、死の闇さえ恐れずに、神に従って行く事ができる。感謝。



聖書の言葉はすべて以下から引用しています。

聖書 新共同訳：

◎共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

◎日本聖書協会

Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988